教皇フランシスコ、米議会での演説　2015.09.24

20160330　和訳および下線付加rev.1　齋藤旬

原文（英文）は<http://w2.vatican.va/content/francesco/en/speeches/2015/september/documents/papa-francesco_20150924_usa-us-congress.html>

和訳は<http://www.cbcj.catholic.jp/jpn/feature/francis/msg0250.htm>　を下訳にした。

実際の演説の動画は：<https://www.youtube.com/watch?v=6WhLwWNnf3o>　など。

副大統領、議長、上下両院議員の皆様、そして親愛なる友人達

　「the freeの地でありthe braveの故郷」にあるCongress上下両院合同会議で演説するようお招きいただき、心から感謝しています。こうした機会を頂いたのは、私もこの偉大な大陸の息子であり、そのために多くの恵みを受けると同時に、皆さんと共通の応答責任を担っているからだと思います。

　このcountryの人々は皆、a missionを担っています。即ちpersonal and socialな応答責任を担っています。また連邦議会議員としての皆さんの応答責任はこのcountryをenableすることです。即ち皆さんのlegislative activity（数陳立法活動）を通してこのcountryをa nationとして成長させることです。皆さんはその様なpeopleの顔であり、その代表です。皆さんは、your fellow citizensの尊厳を守り、困難にめげずに常に共通善を追求するよう求められています。それが政治全体の主要目的だからです。政治による社会運営が成立するのは、政治が一つの召命（a vocation）として、社会のすべてのメンバー特に弱い立場や危機に瀕している人々の成長を促し、彼らに共通するneedsを満たす場合に限ります。即ちlegislative activityはthe people[[1]](#footnote-1)を尊重することを基盤とします。皆さんはそのために、自分を選んだ者達によって招かれ、呼ばれ集められたのです。

　皆さんの働きは、私にモーセの姿を二つの形で思い起こさせます。一つには、the people of Israelの父祖であり、lawgiver（律法をもたらした人）としてのモーセの姿であり、これはjust legislation（公正な立法）によって諸民族（peoples）が一致を目指していくことが必要であることを象徴しています。またモーセのもう一つの姿は、私達を直接に神へと導き、超越的なhuman beingsの尊厳へと導きます。この様なモーセの二つの姿は、皆さんの働きのよいsynthesis（まとめ）となるでしょう。つまり、皆さんはthe law（律法）によって、あらゆる人の顔に表れるthe image and likeness fashioned by God（神の似姿）を保護するよう求められているのです。

　今日、私は皆さんだけでなく、皆さんを通してthe United Statesのthe entire peopleに語りかけたいと思います。即ちこの機会に私は、代表者達にお話するだけでなく、家庭のために日々の糧をかせぎ、貯蓄し、より良い生活を少しずつ築いている数え切れないほど多くのmen and womenと対話したいと思います。これらのmen and womenは、単純に税を納めることに関心を払うのでなく、むしろ自分達の方法によって社会生活を黙々と支えています。彼らは、自らの行動によってsolidarity（共通善による連帯）を生み出し、もっとも困窮している人々を助けるorganization（組織）をcreateしています。

　私はまた、多くの高齢者のpersonsとも語り合いたいと思います。高齢者の皆さんは、経験によって積み上げた知恵の宝庫であり、自分たちの経験談や見識を、ボランティア活動をはじめとするあらゆる方法で分かち合いたいと願っています。多くのかたは引退していますが、この地（land）を築くために今でも元気に活動し続けています。また、若者の皆さんとも対話したいと思います。若者の皆さんは、容易な提案にまどわされることなく大きく気高い願いをかなえるために働いています。しかしながらしばしば、多くの大人の未熟さのために困難な状況に直面しています。全ての皆さんと私は語り合いたいと思います。貴方方の先達が持つ歴史の記憶を通して、対話したいと思います。

　私の今回の訪米は、何人かのgreat Americansをgood will（善意）のmen and womenが記念する時と重なっています。複雑な歴史と人間の弱さがもたらすrealityの中で、これらの善意のmen and womenは多くの困難や限界に直面しても、より良い未来を築くために懸命に働き、自らを捧げました。自らのいのちを捧げた人すらいます。彼らは、the American peopleが持つthe spiritにいつまでも残る、根本的な価値観を築きました。こうしたspiritをもったpeopleは、多くの危機、緊張状態、紛争があっても、つねに前に進むために必要なものを見いだし、尊厳をもって生きることができます。これらのmen and womenは私達に、realityに関する観察と解釈の方法を教えてくれます。彼らの思い出を称えながら私達は今ここで、たとえ争いの最中であったとしても、私達の文化の根底に保存されたものに目を向けましょう。

　私は、エイブラハム・リンカーン、マーティン・ルーサー・キング、ドロシー・デイ、トーマス・マートンという四人のAmericansについて話したいと思います。

　今年は、libertyの守護者であるエイブラハム・リンカーンが暗殺されてから150周年にあたります。彼は、「このnationが神のもとに新しいfreedomを勝ち取る」ために絶えず働きました。freedomの未来を築くためには、共通善を大切にすることと、a spirit of subsidiarity and solidarityの中で協力することが必要です。

　私達は皆、今の世界が不穏な政治社会情勢にあることを理解し、非常に不安に思っています。私達の世界は、ますます武力衝突、憎しみ、残虐行為の場になりつつあります。それらが神と宗教の名のもとに行われることさえあります。宗教も、個人的な妄想や過激なイデオロギーを免れることはできません。したがって、私達は宗教や他のあらゆることについて、あらゆる種類の原理主義にとりわけ注意を払わなければなりません。religious freedom, intellectual freedom and individual freedomsを守りながら、宗教、イデオロギー、経済システムの名のもとに行われる暴力と闘うためには、繊細なバランス感覚が必要です。一方、私達が特に警戒しなければならないもう一つの誘惑があります。それは、ただ善か悪か（good or evil）、または善人か悪人か（the righteous and sinners）のみに目を向ける過度のreductionism（還元主義、単純化主義）です。現代社会は、傷口が開いたままの傷を抱えており、そのために多くの兄弟姉妹が苦しんでいます。そうした社会では、善悪二つの陣営に分断しようとするあらゆる種類の両極化が働きます。私達はこの動きにも立ち向かわなければならないのです。また私達は、外部からの敵に対しfreeになろうとして、内部の敵を育ててしまいがちであることも知っています。独裁者や殺人犯の憎しみや暴力をまねてしまえば、まねたその人も次の独裁者や殺人犯になってしまうでしょう。That is something which you, as a people, reject.（それは、皆さんがa people[[2]](#footnote-2)として拒否すべきことです。）

　私達は、むしろ希望といやし、peace and justiceをもって応えなければなりません。現在の多くの地政学的、経済的な危機を解決するためには、勇気と知力を結集させなければなりません。先進地域でも、injusticeな組織や行為の影響が目に余るほど明白になっています。私達は、希望を取り戻し、righting wrongs（悪を正し）、maintaining commitments（関わり続け）、そうすることで、the well-being of individuals and of peoples（個人達と諸民族の良好な地上世界生活）をpromoteする目的に向かって尽くさなければなりません。私達は、fraternity and solidarity（共通善による兄弟愛と連帯）の精神を新たにし、共通善のために協力しながら、一つになって共に前進しなければなりません。

　私達が今日直面しているこの様な課題を解決するためには、the United Statesの歴史の中で素晴らしいことを成し遂げてきた、協力の精神を更に新たにする必要があります。この複雑で、重大で、緊急を要する課題に立ち向かうには、私達の資源と才能をpoolし（一括して集め）、自分たちの内にある個々の違いとconvictions of conscience（様々な信念）を尊重しながら互いに助け合わなければなりません。

　このland（地）では、さまざまな宗教宗派が、社会を形成し強化するために大きく貢献してきました。この様な過去と同様に、今日でも宗教者の声が響き続けることは重要なことです。なぜならそれは、兄弟姉妹としての愛の声であり、各個人（each person）や各社会を最大限に生かそうとするものだからです。こうした協力関係は、この世界に現れた新たな形の奴隷制をなくす闘いにおいて、強力な助けとなります。即ち、深刻なinjusticesによって生じたこの新たな奴隷制は、新たな形のsocial consensus（社会合意形成）による様々な新政策によってのみ克服することができるのです。

　私はここで、the United Statesの政治史のことを考えます。そこでは、民主主義[[3]](#footnote-3)がアメリカの人々のmindに深く根付いています。すべての政治活動はthe good of the human personのために仕え、それを促すものでなくてはなりません。また、his or her dignityを尊重することがその基盤になければなりません。「われわれは、以下の真理を自明のことと信じる。即ち、すべての人間は生まれながらにしてequalであり、その創造主によって、生命、liberty、および幸福の追求を含む不可譲不可奪のrights（権利）を与えられている。」（「独立宣言」1776年7月４日）。もし、政治が真にhuman personに仕えるものならば、経済や財政の奴隷に政治がなることはありえないことです。経済や財政の奴隷ではなく、政治とはむしろ、私達が一体となって最高の共通善を築くために、一体となって生活しなければならないという切迫した必要性から生じるのです。即ち、社会（a community）とは特定の利益を犠牲にすることによって、justice and peaceのうちに社会生活（social life）を営み、その財（goods）と利益（interests）を分かち合うことなのです。この様な政治の困難さを過小評価するつもりはありませんが、このことに向かって努力するよう皆さんにお願いします。

　ここで、マーティン・ルーサー・キング牧師が50年前、セルマからモントゴメリーまで、自らの「夢」をfulfill（成就）するcampaignの一環として行進したことを思い起こしたいと思います。その夢は、アフリカ系アメリカ人の社会的、政治的rights（権利）を完全（full）なものにすることでした。この夢は私達を今でも、inspireしつづけています。私は、アメリカ大陸が多くの人にとって「夢」の大陸であり続けていることを嬉しく思います。夢は行動、参加、そして関与につながります。夢は、a peopleの生活の中のもっとも深く真正なものをawaken（目覚め、齋藤補遺：EvangelicalsのKey Word）させるのです。

　ここ数百年の間に、莫大な数の人々が、freedomの未来を築くという夢をかなえるためにこの地にやってきました。私達the people of this continentは外国人に恐れを感じません。なぜなら私達のほとんどが、以前は外国人だったからです。皆さんの中の多くの方々も移住者の子孫であるかと思います。私も移住者の子孫です。そして、次のことを皆さんに申し上げます。私達よりもずっと前にここに住んでいた先住民の人々の権利は、残念なことに、つねに尊重されていたわけではありませんでした。私は、アメリカの民主主義の精神によって心から、those peoples and their nationsに対する尊敬と感謝の念を再度確認したいと思います。過去の出来事は現在の基準では評価しがたいものではありますが、最初に移住者と先住民が出会ったときには、混乱の中で暴力が行われてしまいました。今後は、私達の中にいる外国人が何かを求めてきたら、過去の罪や過ちを繰り返してはなりません。今、「隣人」や周囲のすべてのことがらに背を向けないよう新世代に教えるにあたり、私達も出来るかぎりnobly and justlyに生きるよう努めなければなりません。またa nationを築くためには、常に互いにかかわり合わなければならないと気付くことが必要です。即ち何らかのreciprocal subsidiarity（互恵的補完関係、互いに支え合う心を持つこと）の状態になるために、常に最善を尽くして敵意を退けるのです。皆さんにはそれができると、私は確信しています。

　現代の社会は、第二次世界大戦以降空前の規模で、難民の危機にさらされています。これにより、私達の前には幾つもの大きな課題と数々の難しい決断が迫っています。この大陸でも、何万人ものpersonsが自分や自分が愛する人達のために、より良い機会を求めて中南米から北米に向かっています。自分の子供達のためならば私達も、同じことを望むのではないでしょうか。ですから難民の数の多さにひるんではなりません。彼らをpersonsとして見て、彼らの顔を見つめ、彼らの話を聞き、彼らの窮状に応じて出来るだけのことをしようと努めてください。つねに思いやりをもって、just and fraternalに（個々の状況に応じて適切に、兄弟愛にあふれる態度で）彼らに接してください。問題になりそうなことを全て避けようとする、今日的には普通の誘惑を退ける必要があります。黄金律を思い起こしましょう。「人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい」（マタイ7・12）。

　この黄金律は、私達に明確な方向性を示しています。自分が他の人から示してもらいたいと思うpassion and compassion（情熱と共感）をもって、他の人に接するよう努めましょう。自分が求めている可能性と同様の可能性を他の人も求められるようにしましょう。自分が他の人に手伝ってもらいたいと思っていることを他の人にして、その人の成長を助けましょう。つまり、安全を欲するなら、安全を与えてください。いのちが欲しいなら、いのちを与えましょう。機会が欲しいなら、機会を与えましょう。他の人を測るための物差しは、自分が測られる際に使われる物差しでもあります。私達には、人間のあらゆる発展段階において、そのいのちを守る応答責任があります。このことをこの黄金律は、私達に思い起こさせてくれるのです。

　私はこうした確信のもとに、聖職を始めた時から死刑廃止のために様々な分野でadvocacy（権利擁護活動）をしてきました。私は死刑を廃止することがもっとも良い方法であると確信しています。あらゆるいのちは神聖であり、全ての人が不可譲不可奪な尊厳を与えられているからです。犯罪者が更生してはじめて、社会は恩恵を受けることができます。近年、ここthe United Statesのカトリック司教協議会は、死刑を廃止するよう訴え続けています。私はこの司教達の声を支持すると同時に、just and necessaryな（個々の状況に応じて適切で、必要な）刑罰は、更生を達する希望の余地を排除するものであってはならない、と確信している全ての人を応援します。

　社会問題が深刻化する近年、the *Catholic Worker Movement*（カトリック労働者運動）の創立者であるthe Servant of God、ドロシー・デイのことも忘れてはなりません。彼女の社会運動、即ち抑圧されている者達のためのjusticeとcauseを求める情熱は、福音、信仰、そして聖人の模範によって促されていました。

　この分野における活動が、世界各地でどんなに進展してきたことでしょう。第三の千年期の初めのここ数年の間に、極度の貧困からpeopleを救うための活動がどれほど行われてきたことでしょう。私の確信を皆さんも共有していると思います。即ち、やるべきことはまだたくさんあること、さらには危機的状況と経済的困難とに直面しているときこそ世界中がsolidarity（共通善による連帯）を持つことが欠かせないこと、これらを確信していると思います。また、貧困の悪循環に陥ってしまった私達の周りのpeopleのことを考えるよう、皆さんにお願いしたいと思います。彼らにも希望が与えられるべきです。貧困と飢餓とに対する闘いは、恒常的に多くの最前線において行われるべきですし、また特にその原因にまでさかのぼって対処することが必要です。多くのAmericansが、過去と同様今日もこの問題に対処し続けていることを、私は頼もしく思っています。

　もちろん、貧困飢餓撲滅の素晴らしい活動の中には、豊かさを生み出し、それを分配することが含まれます。天然資源をrightに使い技術をproper（本質的に適切）に用い企業家精神をharness（人間が持つcapacityとして活用）することは、an economy which seeks to be modern, inclusive and sustainable（現代的かつ包摂的で持続可能であることを求める経済）を構成する不可欠の要素です。「ビジネスは、富を生み出し、世界をより良くする高貴な召命です。それは、共通善への奉仕の主要な要素として雇用創出する場合は特に、関連する分野に富をもたらす実り豊かな源となります。」（教皇フランシスコ、回勅「[*Laudato Si’*](http://w2.vatican.va/content/francesco/en/encyclicals/documents/papa-francesco_20150524_enciclica-laudato-si.html)」129）。この共通善には、地球も含まれます。「私達の共有する故郷について全ての人と対話する」（同3）ために、私が先日発表した回勅の中心的なテーマは、この地球なのです。「全ての人がこの会話に加わることが必要です。なぜなら、現在進行しつつある環境問題とその人間的な根元は、私達すべてにかかわり、影響を与えるものだからです。」（同14）。

　私は回勅「[*Laudato Si’*](http://w2.vatican.va/content/francesco/en/encyclicals/documents/papa-francesco_20150524_enciclica-laudato-si.html)」の中で、human activityによって生じる環境破壊のもっとも深刻な影響をなくすために、「私達の歩みの方向を変え」（同61）、勇気と応答責任ある行動をするよう呼びかけています。私達は変化をもたらすことができると、私は確信しています。そして、the United Statesとこの議会は、間違いなく重要な役割を果たします。（実際の演説ではここで教皇はI’m sure.と陳べ、聴衆議員達からstanding ovationをしばしの間受ける。）今こそ、「ケアの文化」（同231）と、「貧困と闘い、疎外された人に尊厳を取り戻し、自然を守るための統合的なアプローチ」（同139）を実施するための、勇気あるactions and strategies（活動と計画）を行う時です。「私達は、技術を制限し、方向づけるために必要なfreedomを手にしています。」（同112）。このfreedomは、「私達のpower（力）を発展させたり制限したりするための賢明な方法を見いだすために」（同78）必要であり、また「より健全で、より人間的、より社会的で、より統合された、もう一つの形の発展のために役立つ」（同112）技術を活用するためにも必要です。私は、Americaの優秀な学術研究機関が、今後、vital（重要で不可欠）な貢献をすると確信しています。

　教皇ベネディクト十六世が「無意味な大量殺戮」と呼んだ百年前の第一次世界大戦のはじめに、もう一人の著名なアメリカ人が生まれました。それは厳律シトー会修道司祭のトーマス・マートンです。彼は、多くの人々の霊的なインスピレーションの源であり、道案内人であり続けました。彼は自叙伝の中に次のように記しています。「私はfree by nature（本質において自由）に、さらに神の似姿として、この世に誕生しました。ところが私は、自分が生まれたこの世の似姿として、自分自身の暴力と利己主義の囚人となってしまいました。この世は地獄絵でした。この世は私のように、神を愛していながら憎み、自分を愛するよう生まれたのに、自分を否定する絶望的飢餓と恐怖を抱いている人であふれているのです。」マートンはとりわけ祈りの人でしたが、それと同時に彼の時代に信じられていたことに挑戦し、幾つもの魂とthe Churchに新しい地平を開く思想家でもありました。彼はまた、対話の人、さらにはpeoplesとreligionsの間の平和をpromoteする人でもあったのです。

　こうした対話の視点から、過去の悲惨な出来事から生じる歴史的な相違点を克服するために行われてきたここ数カ月の取組みについて認識を深めたいと思います。架け橋を築くこと、そして全ての人が、その人ができる範囲で、架け橋を築くことができるように助けることが私のdutyです。対立していたcountriesが対話への歩みを再開するとき――対話はthe most legitimateな（地上世界的には最も正当な）理由で妨害されるかもしれませんが――、すべての人の前に新たなopportunities（チャンス）が開けます。またこのためには勇気と大胆さが必要でしたしこれからも必要です。それは無責任な行い（irresponsibility）とは違います。良い政治指導者とは、すべての人の利益を考えながら、pragmatic（現実的）に開かれた心をもってthe moment（チャンス）をつかむ人です。良い政治指導者は、空間をわがものにすることよりも、行動を始めることをつねに選びます。（教皇フランシスコ使徒的勧告『福音の喜び』222－223参照）

対話と平和のために働くことは、世界中の武力紛争を鎮め、最終的に終わらせるために真に尽くすことでもあります。ここで私達は、自らに問わなければなりません。なぜ、凶悪な武器を、個人や社会に計り知れないほどの苦しみを与えることを計画している人々に、売り続けているのでしょうか。残念ながら答えは、皆さんもご存じのように、単にお金をもうけるためです。血にまみれたお金です。多くの場合、その血は無実の血です。この恥ずべきそして非難に値する沈黙の中で、この問題に立ち向かい、武器売買を止めさせることは、私達のdutyです。

　この地（land）の三人の息子と一人の娘である四人には、四つの夢がありました。リンカーンにはliberty。マーティン・ルーサー・キングには、liberty in pluralityとnon-exclusion（非排除）。ドロシー・デイにはsocial justice and the rights of persons。トーマス・マートンには、the capacity for dialogue and openness to God。

　彼らはthe American peopleの四人の代表者です。

　私はこの訪米（visit to your country）の最後に、フィラデルフィアで行われる世界家庭大会に参加します。私の訪米の間、家庭が何度も人々の注目を浴びるよう願っています。このcountryを築くために、家庭はどんなに重要な役割を果たしたことでしょう。また、私達の支えや励ましとして、家庭はどんなに価値あるものであり続けていることでしょう。しかし私は、家庭のことを心配せずにはいられません。おそらく以前とは全く違って、今の家庭は、家庭内からまた家庭の外から脅威にさらされています。基本的な人間関係が、それは結婚と家庭の根幹であるのにも関わらず、疑問視されています。私は、家庭生活の重要性、そしてとりわけその豊かさと美しさをひたすら強調し続けるのみです。

　もっとも弱い立場にある家族、即ち、若者や子供達にとりわけ目を向けましょう。彼らの多くにとって、未来は計り知れない可能性に満ちています。しかしその一方で、戸惑い、目標を失い、暴力、虐待、失望という絶望的な迷路に陥ってしまう若者や子供達もいます。彼らの問題は私達の問題です。その問題を避けて通ることはできません。私達は共にその問題に向き合い、話し合い、対話に行き詰まることなく、有効な解決策を見いださなければなりません。単純化しすぎているかもしれませんが、若者が未来を担う力を持てず、新しい家庭を始められない状況を強いられる文化に、私達は生きていると言えるのではないでしょうか。この文化は、他の人々には非常に多くの選択肢を与えていますが、そうした人々も家庭を持つことを思いとどまっています。

　a nationは、リンカーンがしたようにlibertyを守るならば偉大であると見なされます。また、マーティン・ルーサー・キングがしようとしたように、全ての兄弟姉妹のfull rightsが尊重されることを人々が「夢見る」ことができる文化が育まれるならば偉大であるとみなされます。さらに、ドロシー・デイが絶えず尽力したように、justice and the cause of the oppressedのために奮闘するならば偉大であるとみなされます。そしてa faithが、トーマス・マートンのような観想（contemplation）の内に平和の種をまき、対話の実りをもたらします。

　この演説の中で私は、皆さんの文化的遺産とthe spirit of the American peopleの豊かさの一部に触れようと努めました。大勢のpeopleを夢へと奮起させてきたこの地を、できるだけ多くの若者が受け継ぎこの地で生活できるように、このspiritがますます発展し成長していくことを望みます。

　　神がアメリカを祝福してくださいますように。2015.09.24

1. 齋藤補遺：[Catholic Encyclopedia](http://www.newadvent.org/cathen/08748a.htm)には、”the people”は「聖職外の平信徒達」を意味するlaityという英単語の語源である古ギリシャ語*laos*の原義である、という記述がある。即ちカトリックの伝統ではthe people はsovereignty（主権）を持たないと考えられてきたことが分かる。一方米国で19世紀に編纂された法辞書である[*Black's Law Dictionary*](https://en.wikipedia.org/wiki/Black%27s_Law_Dictionary)では "People"の項目に、"The people" identifies the entire body of the citizens of a jurisdiction invested with political power or gathered for political purposes.という記述がある。the people はsovereigntyを持つという考え方が19世紀のUS jurisprudenceでは確立していたことが分かる。今回の米議会フランシスコ教皇演説でカトリックが、the peopleはsovereign（主権者）であるという考え方をほぼ認めたことが分かる。 [↑](#footnote-ref-1)
2. 齋藤補遺：脚注１と同様に考えれば、このa peopleは「一つの国家（state）の主権者」と解釈できる。 [↑](#footnote-ref-2)
3. 齋藤補遺：19世紀のカトリックは民主主義を認めなかった。隔世の感がある。感慨深い。 [↑](#footnote-ref-3)